

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 鳥海 希世子

本論文「市民メディア・デザイン：デジタル社会の民衆芸術をめぐる実践的メディア論」は、1990年代半ば以降に日本各地で立ち上がった市民メディア（マスメディア事業者のプロではなく、一般市民によって運営されている情報発信、メディア表現活動）が、デジタル情報化が著しく進展するにもかかわらず、必ずしも持続的に活動を発展させられないでいる問題状況の認識からはじめられている。その問題状況を克服するための思想的拠りどころを歴史的な「民衆的工藝」（柳宗悦）、「限界芸術」（鶴見俊輔）、サークル運動などに求められ、市民のメディア表現を活性化させるための実践的メディア論的な枠組みを提示され、それにもとづいて新たなワークショップ型の「メディア遊び」である「あいうえお画文」（デジタル機器で撮影された写真を、伝統的な「あいうえお文」のルールで組み合わせ、小さなデジタル・ストーリーテリングをおこなう活動）を企画、実践した結果と、それを総合的な地域社会連携実践として発展させた実践の軌跡が記述、分析されている。最後には新たな市民メディア・デザイン論が展望されている。

■構成と概要

論文は全8章からなっており、それらは近代日本における先行研究と先行実践が吟味される第一部「歴史思想編」（1章から3章）と、自らが考案、実施したメディア遊び「あいうえお画文」をめぐる第二部「実証実践編」（4章から6章）に大きく分けられている。

序章では、市民メディアが持続的、発展的に展開できていないという問題状況が浮き彫りにされ、この論文がそれらを克服するためにデザインという観点と営為を組み込んだ実践的メディア論であること、民藝などの歴史的知見を活用していくことなどが示されている。

第一部「歴史思想編」の1章では、本論文の問題意識、目的、枠組み、構成が明らかにされている。すなわち本論文の市民メディアに対する問題意識、「民衆芸術」やデザイン、実践的メディア論の意味するところが明らかにされるとともに、本書を貫く市民メディア・デザインの枠組み（メディアを用いた一般市民による創作→合評→公開という循環的活動を実践し、地域社会のなかに埋め込んでいく営みのモデル）が示される。最後に全体構成を説明されている。

2章では、メディア論の隣接領域に見出せる市民メディアをめぐる先行研究の批判的検討がおこなわれている。すなわち1950年代から60年代にかけての「思想の科学研究会」、70年代から80年代にかけてのニューメディア研究、そして90年代以降のパブリック・アクセ

ス論が取り上げられ、先に示された市民メディア・デザインの枠組みに基づき、それらの可能性と限界が浮き彫りにされ、総じてデザインという観点からの取り組みが見当たらないことが明らかにされている。

3章では、市民の創作、表現、学び合いに関する先行実践が日本近代史のなかから見出され、それらに対する批判的検討がおこなわれている。すなわち、1920年代以降の農民や労働者に対する芸術・教育運動と50年代以降のサークル運動の概史を跡づけられた後、益子焼に着目した民藝運動と農民サークル（埼玉県土合い村）の展開過程が、市民メディア・デザインの枠組みに基づいて検討され、それらの可能性と課題が明らかにされている。

第二部「実証実践編」では、以上の歴史思想的な知見を生かしつつ、鳥海本人が考案、実施、評価分析をおこなった実証研究、および実践研究の内容が明らかにされている。

まず冒頭の「はじめに」において第一部と第二部の連関が明らかにされ、メディア遊び「あいうえお画文」が生みだされる背景が説明されている。

4章では、2007年から09年にかけて国内3地域で実施されたワークショップ「あいうえお画文」の企画、実施の過程が記述され、評価分析がおこなわれている。そこでは「あいうえお画文」が一時的で祝祭的な共同体を生みだす力があることが明らかにされている。

5章では、「コミュニケーション・インフラストラクチャー理論（ボール・ロキーチら）」の枠組みを援用した東京都文京区における住民のメディア利用に関するアンケート調査（2011年実施）、および聞き取り調査の結果が明らかにされている。地域住民のあいだで日常的なおしゃべりのような活動があることが自発的な地域活動を引き起こす要因であること、この地域には参加型コミュニティ・メディアと呼べるものが不在であることが明らかにされ、「あいうえお画文」を用いた地域連携活動をおこなう必要性が示されている。

6章は、文京区で実施された「あいうえお画文：写真で投稿！まちの思い出つむぎプロジェクト」の概要が、市民メディア・デザインの枠組みにもとづいて論じられている。それは、4章のワークショップを中心に、東京大学、文京区、地域の商店街、学校、サークル団体などの協力連携のもと、ケーブルテレビ局、ウェブサイト、チラシなど多様なメディアを用いておこなった本格的で総合的な社会連携実践であり、一種のエスノグラフィとして記述、分析されている。

終章ではここまでの知見を総括するとともに、前半で提示された市民メディア・デザインの枠組み自体が再検討され、更新されている。またこれからの市民メディア研究や実践に対してデザインの観点を持ち込んだ実践的メディア論のもつ意義が確認されるとともに、今後の研究の展望がなされている。

■評価と議論

(1) これまで歴史分析、調査分析が大半であったメディア論の領域にデザインの観点を持ち込み、歴史社会的状況を踏まえながら新たな市民メディアのあり方を構想、実践していくこと、すなわち市民メディア・デザインの必要性を訴え、実践研究を通してそのモデルを発展的に提示するという主題は、荒削りながらメディア論の新たな領域を提示しており、高く評価された。

(2) 近代日本の芸術・社会運動であった民藝運動、サークル活動などと新しい市民メディアを結びつける着眼点のよさ、文理越境的な学際的プロジェクトとして「あいうえお画文」を総合的な社会連携実践にまで高め、持続的な活動として定着させてきた実践的研究能力の高さが評価された。

(3) 先行研究の吟味には不十分なところがあり、またデザインという概念の意味するところが十分に見極められていない。そのあたりを補えば、鳥海の市民メディア・デザインのモデルはもっと一般化、あるいは深化させていくことができるであろうと指摘された。

(4) 終章の展望部分が厚みに欠けている。この研究の意義を、メディア論の理論や思想、あるいは内外のさまざまなメディア実践に照らし合わせつつ、より発展させていくことが必要であろうと指摘された。

以上のような指摘があったが、全体としてはこれまでにない歴史的思想的厚みと、デザインマインドを併せもち、メディア論、メディア・リテラシー論、地域社会論、ワークショップ研究などの領域にも貢献しうる市民メディア論として評価され、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断した。